

外界懐疑論に対するカヴェルの応答  
Cavell's Response to External World Skepticism

森内康太

**Abstract**

Stanley Cavell deals with skepticism of the existence of the world mainly in Part II of his book *The Claim of Reason*. As far as I can see, he distinguishes between the kinds of skepticism he is dealing with, but he does not explicitly indicate the distinction. This study investigates what kinds of skepticism Cavell responds to and how he responds to them. In conclusion, this study shows that he is responding to each of the two types of skepticism: high-standards skepticism and radical skepticism about the criteria of justification.

**(1) 研究テーマ**

本研究では、スタンリー・カヴェルの外界懐疑論への応答を扱う。カヴェルは主にその著書 *The Claim of Reason* の第II部において外界懐疑論の問題を扱う。筆者の見る限り、カヴェルは自身が相手とする懐疑論の種類について区別を行ってはいるが、その区別について明示的に論じてはいない。そこで、本研究は、カヴェルの外界懐疑論に対する応答を再構成し、それがどのような種類の外界懐疑論に対して、どのような仕方で応答を行なっているものであるかを明らかにすることを目的とする。

本稿の構成は次の通りである。まず(2)研究の背景・先行研究では二つのことを論じる。2-1節では外界に対する懐疑論が大きく二つに分類可能であることを確認する。2-2節では、カヴェルの記述とそれに関する先行研究の調査をもとに、カヴェルの外界懐疑論に対する応答を再構成する。次に(3)筆者の主張では、再構成したカヴェルの議論が、先に確認した二種類の外界懐疑論のそれぞれへの応答になっていることを論じる。最後に(4)今後の展望では、本研究が今後取り組む問題を示す。

**(2) 研究の背景・先行研究**

**2-1.二種類の懐疑論**

ここでは、Williams(2001)の記述に基づいて、外界懐疑論を、外界に関する我々の知識をどのように疑うかという観点から二つに分類する。

一つ目は、「高い基準の懐疑論[high-standards skepticism]」である。高い基準の懐疑論は一般に、「我々の信念の多くがプラスの認識論的地位[positive

epistemic status]—高いプラスの認識論的地位さえも—を持つことは認めるが、それが適切にいわゆる知識に相当するほど十分に高い地位を有していることを否定する」(Williams,2001:6). この懐疑論が知識として認めるのは、「否定不可能なほど[indefeasibly]に正当化された真である信念」と、「絶対的な確実性」をもって正当化された真である信念(Williams,2001:6)である。

この種の懐疑論を外界に適用した場合の主張は次のようになる。すなわち、我々の知覚は外界についての信念をもつことをある程度は正当化しうるが、その信念を確実性をもって正当化することはできない。そのため、我々は外界についての知識をもたない。

二つ目は、「徹底的懐疑論[radical skepticism]」である。徹底的懐疑論は、「正当化された信念をもつレベルに達する我々の能力すらをも否定する」(Williams,2001:6)懐疑論である。この懐疑論のもとでは、我々は「認識論的地位に関して根拠のある区別をつける」(Williams,2001:6)ことさえもできないということになる。

高い基準の懐疑論では、知覚に基づいて形成された信念は、知覚に基づかずに形成された信念よりも正当化されているということは認められていた。例えば、目の前にリンゴがある（レモンはない）ような知覚経験を得た際には、「目の前にリンゴがある」という信念は、確実性をもった正当化はなされていないとしても、「目の前にレモンがある」という信念よりは正当化されているということは認められていた。

しかし徹底的懐疑論ではそれさえも否定される。たとえリンゴの知覚経験を得ていたとしても、「目の前にリンゴがある」という信念と「目の前にレモンがある」という信念は、どちらも同じようにまったく正当化されていないということになる。したがって、徹底的懐疑論のもとでは、外界懐疑論の主張は次のようになる。すなわち、我々の知覚は外界についての信念をもつことをまったく正当化しない。そのため、我々は外界についての知識をもたない。

## 2-2.カヴェルの外界懐疑論に対する応答

ここでは、カヴェルの著作 *The Claim of Reason*(Cavell,1979, 以下 CR と表記)第II部、特に外界懐疑の問題について詳しく論じている章である‘The Quest of Traditional Epistemology: Opening’と‘The Quest of Traditional Epistemology: Closing’の記述と、それについて論じた先行研究として Pritchard(2022)の記述をもとに、カヴェルの外界懐疑論に対する応答を確認する。

カヴェルは、自身が問題とする懐疑論者は「我々誰もが最良の状態の知識を例証していると認識する[外界についての]知識の事例に疑問を投げかける」(CR:135)懐疑論者であると述べる。この懐疑論者は「この事例において私は知らない、あるいは知ることができないのだから、私はいかなる事例においても知ることができない」(CR:133)という形で、その主張を一般化することを目的とする。

カヴェルによれば、このような懐疑論者はまず「この事例において私は知らない」ということを帰結させるために、「ある主張の例が与えられ；その根拠が明示され；それに答えられなければ当の主張が否定されるような疑いの根拠が提起される」(CR:132)という形式の論証を用いる。そしてこの論証によって、「その主張が「明らかに誤りである」ということではなく、主張者もはやそれが真であると主張することができないということ」(CR:132)を帰結させる。

例としてカヴェルは「私はここにテーブルがあると知っている」という主張についての懐疑を次のように構成する。

根拠の要求： 例えば、私はどうしてここにテーブルがあると知っているのか？

根拠： なぜならば、私はそれを見ているからだ。あるいは：感覚によって。

疑いの根拠： a)しかし、私は本当は何を見ているのか？私はもしかしたら夢を見ていたり、幻覚を見ていたりするかもしれないのではないか？

b)しかし、それでは十分ではない。それはデコイかもしれない。

c)しかし私はそのすべてを見てはいない。私が見ているほとんどは...

結論： それゆえ、私は知らない。(CR:144)

先に述べた通り、ここでの懐疑論者はその懐疑を外界についてのあらゆる知識に一般化させようとするが、カヴェルによれば、そのためには論証の出発点となる主張が、特定の対象[specific object]（例えばそのゴシキヒワ[the goldfinch]、ルイ 14 世の書物机）についてのものではなく、一般的な対象[generic object]（例えば、テーブル一般）についてのものでなくてはならな

い(CR:138). ここで一般的な対象と言われているのは、それらについて問題が生じるとしたら、「識別、特定、描写の問題」ではなく、「それらが存在しているかどうか、本物であるかどうか、実際にそこにあるかどうかを私たちが知ることができるか」(CR:52)という問題であるような対象である。

カヴェルによれば、特定の対象について私が知識を持たないことが明らかになったとしても、「そのことは、いったい何が知られうるかについての、あるいは全体として、プロジェクトとしての知識についての含意を与えず、あなたの訓練不足や判断における軽率さ、あるいはこの事例における機会や物理的条件の相対的な貧しさについての含意しか与えない」(CR:133). それに対して、一般的な対象についての事例は、「個人的な訓練や判断の慎重さといった要素や、機会や条件といった文脈上の問題が無関係な事例」(CR:133-4)であるために、知識全体についての帰結をもたらすことができる。

カヴェルは以上のようにして懐疑論者の論証を構成した上で、そもそも懐疑論者が出発点として想定する（想定せざるをえない）一般的な対象についての言明は主張として成立しえないものであり、従って懐疑論者はジレンマに陥らざるを得ないことを次のように指摘する。

伝統的な知識の探求が巻き込まれるジレンマは、このように定式化することができる：もしその手続きが首尾一貫したものであるべきならば、それは具体的な主張の探求でなくてはならない；もしその結論が一般化されるべきならば、それは具体的な主張の探求ではあり得ない。その首尾一貫性がなければ、それはそれが持つように思われる明白さを持っていない；その一般化がなければ、その結論は懐疑的なものではあり得ない。(CR:220)

ではなぜ、一般的な対象についての言明は首尾一貫した有意味な主張ではあり得ないのか。カヴェルによれば、それは「あなたが言うことが理解可能であるべきならば、文法上、あなたが言うことの原因やあなたが何かを言うことのポイントがなくてはならない」(CR:208)が、一般的な対象についての発言にはそれらがないためである。つまり一般的な対象は誰もがそれをそれと識別できるような対象であり、また識別を妨げる要因もないような環境に置かれているものであるから、我々はそれについて「私はここにあると知っている」という言明がなされる理由やポイントを見出すことができない。したがってそれを主張として理解することができないのである。

またカヴェルによれば、懐疑論者は、疑いの根拠として「私には対象の一部しか見えていない」という事実を提示するときにもジレンマに陥っている。もしこの主張が一般的な対象に向けられたものであるとするならば、ここで懐疑論者は我々と対象との関係を、我々の現実におけるモデルとは異なるモデル、すなわちまるで我々の位置が対象に対して固定されており、常に対象の半分しか見えていないようなモデルで考えている。したがって懐疑論者の主張は我々の知識に対しては何の影響も及ぼさない。またこの主張が我々の知識に対して影響を及ぼすためには、それは具体的な主張でなくてはならず、そのとき懐疑論者は我々の知識一般に疑いを向けることができない (CR:202-203)。

したがって、懐疑論者の論証は、疑いの対象として我々に理解不可能な主張を置いており、また疑いの根拠を示すために我々の現実とは異なるモデルを設定しているということになる<sup>1</sup>。

ただしカヴェルによれば、懐疑論者が構成する論証は合理的なものではないが、懐疑論者が世界についての知識全体に対する問いを立てること自体は自然である。というのも、このような問いは、「言語を所有するに足りるほど複雑な生き物、あるいは、重荷を負わされている生き物の自然な経験を表現する反応」(CR:140)であるためである。

では我々はどのようにしてそのような問いに至るのか。カヴェルは一例として、「それ[懐疑論の問い]はあなたが「完全に確信している」あるいは「確実であると思っている」事柄について、あなたが明らかな仕方で間違っていたことに対する反応として生じる」(CR:140)ことがあるとする。つまり我々は、自分が確実なものであると考えていた事柄が実は間違っていたという経験から、自分が現在知っていると思っているすべての事柄について、我々はそう思い込んでいるだけで、本当は知らないのではないか、という一般化された疑いに向かってしまうことがある。

しかしながら、カヴェルによれば、このような経験から帰結するのは、「我々人間は可謬的である」という道徳 (CR:143)であって、先に示したような懐疑論ではない。このような経験にさらに別の種類の経験、すなわち「自分の感覚は自分がそれについてのものだと思っている世界についてのものではまったくないかもしれない、あるいは、自分が知ることができるのは、対象がどのようにあるように（我々に）見えるかだけであって、対象それ自体がどのようなものであるかは決して知ることができない」と悟るという経験が加わった時に、我々は「徹底的なあるいは形而上学的な懐疑論」(CR:143)に至っ

てしまう。

しかしこのような経験に至ることが自然であると認めるとしても、カヴェルは「私は世界が存在していることを知らない」という主張が正しいということを知るわけではない。それは、そもそも世界全体に対する我々の関係は「知ること」(CR:241)ではなく、「世界は受容される [*accepted*] べき」(Cavell, 2002:298)ものであるためである。

Pritchard(2022)は、ここでのカヴェルの指摘は「[ワイトゲンシュタインの]『確実性について』でさらに明確に示されている」(Pritchard, 2022:269)とする。ここでは詳しく論じることはできないが、ワイトゲンシュタインはそこで「我々の最も日常的な確信は[...]実際には完全に理論の及ばない仕方です[*arationally*]抱かれています」ものであり、「合理的評価が可能であるために適当なところになくなくてはならない根本的な蝶番のような確信」(Pritchard, 2022:269)であるとしている。Pritchardの解釈を踏まえるならば、カヴェルは、「世界が存在する」という確信は、我々が普通知識と考えるもの、つまり何らかの正当化のプロセスを経て知識となったものではなく、我々が日常的に様々な合理的な探求を行うためにその前提として受け入れており、それを疑うということが意味をなさないようなものであると主張していると考えられる。

### (3) 筆者の主張

ここでは、以上で確認したカヴェルの議論が、どのような懐疑論に対するどのような応答となっているのかを論じる。

まず、人は自分が確実だと思っていた事柄が実は間違っていたということから、他の事柄についても自分は間違っているかもしれないため、本当は自分は何も知らないのだという懐疑論に陥ってしまうことがある。これは知識の可謬性から生じる懐疑論であるから、高い基準の懐疑論であると言える。カヴェルはこの種の懐疑論に至ったとしても、それは不可謬主義を取ろうとする立場からの帰結であって、我々の知識が可謬的であることを道徳として認めれば問題ないと考えられる。

しかしここで懐疑論から抜け出すことができず、さらに別の種類の経験が加わったときに、懐疑論者は、我々は夢を見ているかもしれない、あるいは我々は対象の一部しか見ていないといったことから、結果として世界の存在に関する知識を疑ってしまうことになる。これは我々の感覚による信念の正当化自体を疑う懐疑論であるから、徹底的懐疑論であると言える。カヴェル

はこのような懐疑論者に対して、二つの観点から応答する。

一つ目は、我々が世界の存在を知り得ないという結論に至るために懐疑論者が構成する論証は、ジレンマに陥らざるを得ないというものである。しかしこれが指摘するのは、あくまでも懐疑論者の論証がうまくいっていないということであって、世界が存在することが証明可能であるということではない。したがって、我々は世界の存在を知り得ないという主張自体は反駁されおらず、また我々は世界の存在を知っているという主張がなされているわけでもない。

そこでカヴェルが提示するのが、「受容[acceptance]」(Cavell,2002:298)という概念である。カヴェルは、世界の存在に関する信念は、我々が他の知識と同じように何らかの正当化プロセスを経てたどり着いたものではなく、我々が生活の前提としてあらかじめ受け入れているものであるということを示す。そしてそれによって、世界の存在に関する信念の正当化を疑おうとする懐疑論者に対して、世界の存在についてはそもそも正当化が問題にならないということを示している。

以上より、カヴェルの議論は、高い基準の懐疑論と徹底的懐疑論の、それぞれへの応答となっていることが明らかとなった。

#### (4) 今後の展望

筆者の見る限り、カヴェルの外界懐疑論に対する応答においては、懐疑論者が提示する主張が主張として成立していないという点が重要性を持っている。本稿ではその点について十分な検討をすることはできていない。しかし、懐疑論者が提示する主張が主張たり得ていないということは明らかではない。そのため、カヴェルの外界懐疑論に対する応答を説得力のある形で再構成する為には、この箇所についてのカヴェルの言語観を踏まえた検討が必要となる。

それから、本稿ではカヴェルが用いる「受容」という言葉は、「世界は存在する」ということを我々が正当化プロセスなしに受け入れているということを示していると解釈している。これは先に述べたとおり、Pritchard(2022)の解釈によったものであるが、この解釈が妥当であるかという点も含め、本研究では「受容」概念を十分に検討することができていない。したがって、カヴェルの「受容」概念については、筆者の解釈を根拠づけるために更なる議論が必要となる。

本研究では、引き続き、以上の点を詳細に検討することによって、カヴェルの外界懐疑論に対する応答をより詳細に再構成し、その説得力を評価する

ことを目的とする。

注

1. カヴェルによれば、懐疑論者が提示する、根拠についての主張（「私はそれを見ている」や「感覚によって」）もまた、それが「特定の主張の特定の根拠」としてではなく、世界について何かを知る際の一般的な方法として提示しようとする限りにおいて、ジレンマが生じている（CR:160 参照）。

#### (5) 参考文献

- Cavell, Stanley. *The Claim of Reason: Wittgenstein, Skepticism, Morality, and Tragedy*. New York: Oxford University Press. 1979.
- “The avoidance of love: A reading of King Lear.” *Must We Mean What We Say?: a book of essays* Updated edition. Cambridge University Press. 2002.
- Pritchard, Duncan. Putnam on radical skepticism: Wittgenstein, Cavell, and occasion-sensitive semantics. In J. Conant, & S. Chakraborty (Eds.), *Engaging Putnam* (pp. 263-288). (Berlin Studies in Knowledge Research; Vol. 17). De Gruyter. Advance online publication. 2022.  
<https://doi.org/10.1515/9783110769210-012>(2023/10/27 にアクセス)
- Williams, Michael. Contextualism, externalism and epistemic standards. *Philosophical Studies* 103 (1):1 - 23. 2001.

(千葉大学)